

Dombey and Son と心的マゾキズム

平野 絹代

I

ディケンズは異常心理に関してよく問題にされる作家であり、わけても犯罪心理は問題にされてきた。さらにサディズムとかマゾキズムに関してもよく問題にされ、最近特に興味の対象となっているようであるが、それらはほとんどが作者との関係において論じられていて、作品との関係では少ない。その中でもマゾキズムに関する二つのすぐれた論文がある。それは Lionel Trilling の *Little Dorrit* につけた序文と心理学者 Edmund Bergler の “*Little Dorrit and Dickens’ Instinctive Knowledge of Psychic Masochism*”〔*American Imago*, XIV (1957), 371-388〕とである。Lionel Trilling の序文はそれ自体すぐれた論文である他に、Edmund Bergler の議論の導火線でもある。というのは Edmund Bergler は Lionel Trilling の議論を心理学的に説明し直し、発展させているからである。Edmund Bergler の論文は、*Little Dorrit* には心的マゾキズムの心理が心理学的見地から見て的確に描かれていること、ディケンズは直観的にその心理を理解していたことを証明したものである。その中で彼は代表的な型の心的マゾキズムの定義として、その特徴である “injustice-collecting” に至る三つの段階を次のように要約している。

1. Through their unconscious provocations, or their misuse of an external situation, these neurotics look for and achieve disappointment, refusal, pain; the “bad” and “refusing” outer world is unconsciously identified with the “bad”, allegedly “refusing” image of the mother of earliest infancy.
2. Not realizing, consciously, that they themselves have brought about

this disappointment, they become *pseudo*-aggressive, acting in righteous indignation and seemingly in self-defense.

3. They then consciously indulge in self-pity, unconsciously enjoying psychic masochism: "This can happen only to poor little me." (*ibid.*, p. 377)

そして自らのことを“The History of a Self-tormentor”の中で語ったミス・ウェイドにこれを当てはめて説明している。すなわち少女時代のミス・ウェイドはわざわざ人に媚びる少女を友に選ぶことによって自ら失望を挑発し、その少女をなじることによって彼女の爪はじきを誘い、最後に自己憐憫に耽けることによって快感を得ている。(*ibid.*, pp. 378-9)

Little Dorrit には中心的人物ドリットを初めとして多かれ少なかれこの要素をもっている心的マゾキストの心理が中心的に追究されている。しかしこれ以前に書かれたディケンズの作品で同じような心理が中心的に扱われていると思われる注目すべき作品がある。それは *Dombey and Son* で、これはこの心理が初めて追究され、*Little Dorrit* の基礎ともなった作品であると考えられる。ディケンズの *Dombey and Son* の着想は「プライド」であり〔Cf. John Forster, *The Life of Charles Dickens* (London, 1927), p. 471.〕高慢な自尊心によって引き起される葛藤を描くことにあった。しかしディケンズの興味は正常な人の葛藤ではなく、神経病的泥濘の状態にある人の葛藤に引きつけられたのである。すなわち彼が追究した葛藤は不正や不幸を避けようとするものではなく、益々それへと陥っていく、*Little Dorrit* のミス・ウェイドやドリットに共通した、マゾキスティックな葛藤なのである。

この小論の主眼は *Dombey and Son* の主要人物ドンビーとイーディス・ドンビーの心理分析をし、Edmund Bergler の定義を拠り所としてこの作品における心的マゾキズムの要素を指摘すること、この作品と *Little Dorrit* との比較をすることにある。

II

ディケンズはドンビーの改心が唐突であるという非難に対して 弁護して、

“A sense of his injustice is within him, all along. The more he represses it, the more unjust he necessarily is” (Preface to *Dombey and Son*) と言っている。これは表面正常な葛藤のように見えるが、第二番目の文章を注視すると“repress”, “necessarily” という言葉の中に病的なものがうかがわれる。すなわちこれらは“injustice”から“justice”へと積極的に改めようとするのではなく、“injustice”を抑圧しようとしても抑えようもなく益々深い“injustice”に陥るというドンビーの姿を暗示しているからである。さらにディケンズはドンビーの苦悩を“self-inflicted torment” (*Dombey and Son*, Ch. XL) と表現しているが、これはミス・ウェイドについて表現された“self-tormentor”を連想させる。これらのディケンズの言葉の中にすでにドンビーの葛藤のマゾキスティックな性格が暗示されているのである。創作された結果から考えればディケンズの第一の興味はドンビーの改心にあったのではなく、マゾキスティックな意識や葛藤を追究することにあつたと思われる。事実ドンビーは罪意識はもっていてもそれを改めようとする積極的な努力を見せていないのであるから、ドンビーの改心はディケンズ自身が、そして近年になって Kathleen Tillotson が説得的に弁護している〔*Novels of the Eighteen-Forties* (Oxford, 1961), pp. 165-171〕にもかかわらず、なお唐突な感を免れることはできない。しかしここで問題とするのは改心ではなく、ドンビーの複雑な心理を分析、説明することである。

ドンビーは最初商業的価値を絶対視し自らその誇りの権化であつたが、次々とその誇りを打ち砕かれる事件が起り、最後にこれまで否定していた人間的情愛の価値を認めるようになるという、本質的には *Christmas Carol* のスクルージと同じ変革を蒙る人物である。

が違うところはドンビーの性格がはるかに複雑であり、意識の深みまで掘り下げられていることである。彼は最初石のように冷いみの性格に描かれて単純な印象を与えるが、実は複雑に働く感情の源を有していることを理解されなければならない。ドンビーのジレンマは人間的情愛の価値を否定しながら、そ

れに対する内的要求のあることである。しかもその要求が強まれば強まるほど自らの殻に入りこんで自己疎外を深めていくことである。彼は一人息子ポールへの利己的な愛情を通じてその感情に目覚めるが、他方ポールの死後敗北感や嫉妬心のために再び自己の殻を閉じてしまう。彼の不健康な心は、ポールの死に際して皆がポールに示す同情や愛情を自分に対する侮辱と受取るところに現れる。

So! from high to low, at home or abroad... every one set up some claim or other to a share in his dead boy, and was a bidder against him!... To think that this lost child... allied with whom he was to have shut out all the world as with a double door of gold, should have let in such a herd to insult him with their knowledge of his defeated hope... (*Dombey and Son*, Ch. XX.)

このように彼の強い自意識は周囲を曲解してすべてを自分の敵にまわしてしまうが、この心の働きが強烈に集中するのが娘のフロレンスである。彼女は最初は彼にとって全く無関心な存在であったが、新しい感情が目覚めるにつれていろいろな自意識を刺激する目障りな存在になっていく。以下にドンビーのフロレンスに対する心の動きを辿ってみよう。

フロレンスが彼を脅かす存在になり始めるのは先妻の臨終の時である。このとき妻と娘がかき抱くのを見て彼は “a mere spectator—not a sharer with them—quite shut out” (*ibid.*, Ch. III) と突然疎外感に襲われる。と同時に娘にその感情を握られ、咎められているように感ずる。“He almost felt as if she watched and distrusted him. As if she held the clue to something secret in his breast” (*Loc. cit.*) そしてすでにこのときに “he was afraid that he might come to hate her.” (*Loc. cit.*) と書かれ、今後のドンビーの娘に対する感情の方向が暗示されている。その後息子ポールに対して愛情が目覚め自分だけがその愛情を独占しようとするが、ポールは自分ではなく娘と強い愛情の絆に結ばれるようになり、ドンビーは深い疎外感に陥る。この時までにはフロレンスは自分の行く手を遮ぎる脅威となっており（もちろんこれはドンビーの意識において

のみのことであるが)、ドンビーは激しい嫉妬にかられて彼女を勝ち誇るライバルと見なす。こうして彼は疎外が深まれば深まる程、愛情の必要を感じずれば感ずる程、実は自分を救う第一人者であるはずのフロレンスを敵にまわしてつき離してしまうのである。その後後妻として誇りをもって迎えたイーディスはフロレンスを庇ってドンビーに対しては公然と反抗対立し、彼を決定的な疎外に沈めてしまう。そしてフロレンスは決定的に行く手を遮ぎる邪魔者、憎悪すべき対象とみなされるようになる。しかしこのようなドンビーのフロレンスに対する見方は全く根拠のないものであり、フロレンスは父親の愛情を自分に向けようとけなげにも努力し続けるような人物である。結局ドンビーは、自らの主義から索寞たる生涯を送りしかも疎外感に益々苦しめられるようになると、意識的にフロレンスを彼の拷問者に仕立て上げてしまうのである。彼の心理を表わす鍵ともなるのは、ハンケチの下からのぞいて娘の自分に対する愛情を知って感情が和らいだ瞬間、娘とイーディスとの親密さを知って、永久に自己を閉ざしてしまうあの劇的な場面 (*ibid.*, Ch. XXXV) である。ここで彼は娘の真の姿、自分のライバルでなく、ポールと等しく我が子、自分の慰め手となってくれる我が子であることを認める。そして疎外からの救済者を見付けるにもかかわらず、イーディスの出現によって再び嫉妬を呼び覚ませ娘を永久に拒絶してしまう。すなわちドンビー自らが自分の求めていたものを拒絶するのである。結局ドンビーは自ら疎外を深めて苦悩を招きながら、その責任をフロレンスに転嫁するのである。そしてドンビーは自らの良心に対して自己正当化しながら、意識的にフロレンスの被害者になっているのである。

In his sullen and unwholesome brooding, the unhappy man, with a dull perception of his alienation from all hearts, and a vague yearning from what he had all his life repelled, made a distorted picture of his rights and wrongs, and justified himself with it against her. The worthier she promised to be of him, the greater claim he was disposed to ante-date upon her duty and submission. When had she ever shown him duty and submission? Why, he and she had never been, from her

birth, like father and child! They had always been estranged. She had crossed him every way and everywhere. She was leagued against him now. Her very beauty softened natures that were obdurate to him, and insulted him with an unnatural triumph. (*ibid.*, Ch. XV)

以上のようなドンビーの心理は明らかにマゾキスティックであり、自ら周囲を曲解することと愛情を拒絶することによって疎外を招きながら (Edmund Bergler が心的マゾキズムについて要約した三段階の中の (1) に当る)、他人に責任転嫁して自己正当化し (全くそのままではないが事実上、要約 (2) に当る)、意識的に自らを被害者に仕立てる (事実上、要約 (3) に当る) 働きがドンビーの心の中に起っている。この同じ愛情のジレンマはもっと極端な形で *Little Dorrit* のミス・ウェイドの中に追究されたが、彼女の場合も、愛情の飢餓にもかわらず、周囲の曲解、愛情の拒絶、挑発によって自らを自己疎外のどん底に埋めていく。外観的には彼らの間には共通点がないようであるが、ドンビーのプライドの仮面をはがせばその下にはミス・ウェイドと同じ症状が見られるのである。

ドンビーの妻、イーディス・ドンビーは彼より病的で紛れもないマゾキストであり、*Little Dorrit* の人物、ミス・ウェイドやクレナム夫人に近い激しさ、病的さを含んでいる。彼女も外観的には負から正への積極的な (フロレンスへの愛を通してこれ以上の墮落を防ごうとする) 葛藤をもつが、ひっきょうそれは不可能で、あるのは唯絶望感だけである。心の中にある病的な自意識、すなわち屈辱感が彼女を益々自暴自棄的な行為へ、墮落へと駆りたてて行ってしまうからである。彼女も又ミス・ウェイドのように挑発によって自ら不幸の泥濘に陥っている。ドンビーとの結婚がまさにそれである。金のためにドンビーと結婚することが屈辱であると知りながら、母親のスキュートン夫人が導くまま自暴自棄的に結婚する。しかもその理由たるや “willing to be hateful to itself [=her own pride] for once and for all” (*ibid.*, Ch. LXIII) である。彼女自ら

の意志によって阻止できるにもかかわらず不幸に飛び込んでいくのであるから、自ら不幸を挑発したのと同じである。しかも次のように全責任（もちろん母親にも大きな責任はあるが）を母親になすりつけて非難攻撃し、自己憐憫に耽っている。

‘What do you mean?’ returned the angry mother. ‘Haven’t you from a child—’

‘A child!’ said Edith... ‘when was I a child? What childhood did you ever leave to me? I was a woman—artful, designing, mercenary, laying snares for men—before I knew myself, or you, or even understood the base and wretched aim of every new display I learned. You gave birth to a woman. Look upon her. She is in her pride tonight.’ (*ibid.*, Ch. XXVII)

イーディスのこの態度もやはり、自ら不幸を挑発しながら（Edmund Bergler の要約 (1) に当る）、他人を非難攻撃し（要約 (2)）、被害者としての自分に対して自己憐憫に耽る（要約 (3)）という心的マゾキズムを呈している。

III

以上分析したようにドンビーとイーディス・ドンビーの心理描写の中心となるのは心的マゾキズムであり、その心理は正確に描かれている。しかし彼らの場合どこか抽象的なところがあるとすれば、それは一つには描き方にある。ディケンズは彼らの心理の最もマゾキスティックな部分の説明に、「プライド」という抽象的な言葉を使っている。ドンビーの禁欲的な愛情の拒絶の部分は次のように描かれている。

It may have been that in all this there were mutterings of an awakened feeling in his breast... But he silenced the distant thunder with the rolling of his sea of pride. He would bear nothing but his pride. (*ibid.*, Ch. XL)

又、イーディスのマゾキスティックな葛藤は、彼女の自白的な言葉によって、次のように表わされている。

‘I have dreamed...of a pride that is all powerless for good, all powerful for evil; of a pride that has been galled and goaded, through many shameful years, and has never recoiled except upon itself; a pride that has debased its owner with the consciousness of deep humiliation, and never helped its owner boldly to resent it or avoid it... (*ibid.*, Ch. LXIII)

彼らの心理描写を抽象的にしているもう一つの理由は彼らの「プライド」自体にある。彼らのプライドは病的な精神に不適當と思われるほどの強靱さ、又は高貴ささえ有している。ドンビーやイーディスはいかに不正であり、又墮落していようと卑劣では決してなく、それについていかなる非難を受けるのも潔しとしないであろう。ドンビーは不遇の極みにあっても一度追い出した娘の助けを求めようとはしないし、イーディスはカーカーとの失踪事件において身の潔白を守る。そういう高い「プライド」を有するために彼らは、屈辱感にさいなまれる卑屈な、病的な現実の人間とはおよそかけ離れた悲劇的な人間像を形成している。すなわち彼らは激しい嫉妬や激情のために目前にある幸福を捨てて自ら不幸に陥っていく悲劇の姿を呈している。Kathleen Tillotson がドンビーを悲劇の姿としてリア王に喩え (*op. cit.*, p. 170), イーディス・ドンビーを幾分批判的に“tragedy queen”と呼んだ (*ibid.*, p. 179) のは故あることである。

以上のようにドンビーやイーディス・ドンビーはある意味で美化されて描かれているが、その裏にはすでに見てきたようにマゾキストとしての姿が的確に追究されている。*Dombey and Son* を書く頃のディケンズは *Little Dorrit* を書く頃のディケンズとはあまり劣らずその心理を理解していたようである。しかし描写に抽象的なところがあることによっても察せられるようにまだ模索中のところもあった。*Little Dorrit* においては「プライド」という抽象的な言葉はふりまわされなくなり、ドンビーやイーディスの強靱な、又は高貴な「プライド」はなくなり、もっと現実の姿に引き下されている。*Little Dorrit* に登場するマゾキスト、ドリット、ミス・ウェイド、クレナム夫人などはいずれも卑しいことや悪事ややってのけることができ、彼らの高慢さは全くの空虚な装いにすぎ

ない。だから彼らはドンビーやイーディス・ドンビーより一層深い罪意識や屈辱感を持ち、他人に軽蔑を受けたり咎められはしまいかと不断胸々としていなければならない。その点 *Little Dorrit* の心理描写の方が *Dombey and Son* におけるより現実的で意識が一層細やかに掘り下げられていることになる。*Dombey and Son* についてすでに引用した心理描写と比較するために、*Little Dorrit* の中心的人物ドリットの描写を以下に引用しよう。

ドリットは「マーシャルーシア監獄の父」という称号を獲得して得々となっているが、何分囚人の身であり、乞食同然の暮しをしていることに対する屈辱感はその全神経を脅している。あるとき牢番チヴェリーにいつもにない軽率なあしらいを受けると、「マーシャルーシア監獄の父」としての威厳を傷つけられたかに思い、その場は堂々と引上げるが、部屋に入ると次のように激しく卑下したり、自己憐憫に陥ったりする。

“By little and little he began; laying down his knife and fork with a noise, taking things up sharply, biting at his bread as if he were offended with it... At length he pushed his plate from him, and spoke aloud...

‘What does it matter whether I eat or starve? What does it matter whether such a blighted life as mine comes to an end... What am I worth to any one? A poor prisoner, fed on alms and broken victuals; a squalid, disgraced wretch!’

.....

‘O despise me, despise me! Look away from me, don’t listen to me, stop me, blush for me, cry for me—Even you, Amy! Do it, do it! I do it to myself! I am hardened now, I have sunk too low to care long even for that.’

.....

‘And yet I have some respect here... Go out and ask who is the chief person in the place. They’ll tell you it’s your father... Well then... Is your father so universally despised? Is there nothing to redeem him? Will you have nothing to remember him by, but his ruin and decay? Will you be able to have no affection for him when he is gone, poor castaway, gone’ (*Little Dorrit*, Bk. I, Ch. XIX)

このように自ら故意に屈辱感を高ぶらせておいて最後に自己憐憫に涙するというマゾキスティックな感情の起伏は具体的に巧みに表現されている。

もう一つ例をあげると、出獄後娘のエイミーに不当な扱いをしていることに対する罪意識があって彼が咎められないのに激しく自己弁護する場面である。

There was a reproach in the touch so addressed to him that she had not foreseen . . . He began to justify himself; in a heated, stumbling, angry manner, which made nothing of it.

‘I was there all those years. I was—ha—universally acknowledged as the head of the place. I—hum—I caused you to be respected there, Amy. I—ha hum—I gave my family a position there. I deserve a return. I claim a return. I say, sweep it off the face of the earth and begin afresh. Is that much? I ask, is *that* much?’ (*ibid.*, Bk. II, Ch. V)

このように咎められないのにむきになる態度はドリットの内面の罪意識の深さを表わしているのであり、*Dombey and Son* ではこのように巧妙な描き方はあまり見られない。すなわち *Little Dorrit* の方が一層具体的であり、一層意識が深く掘り下げられているのであって、*Dombey and Son* より発展させられたことを示している。ディケンズは *Dombey and Son* において「プライド」について扱ったと述べているが、実は心的マゾキズムの心理を追究したのである。この作品においてははまだ具体性の欠除はあるが、その心理はよく理解されている。そして *Little Dorrit* においてはそれが土台となって一層その心理が掘り下げられ、心理学者 Edmund Bergler が “LITTLE DORRIT is psychologically first-rate” (Edmund Bergler, *op. cit.*, p. 371) と認めるような作品となったのである。